厭蝕太平樂記

二拾七

へ13
3553
27

一暦應五年東記巻二十振也

同様

一住吉社神人発動之事

附り安部田哉宝忠之事

一天竜寺供養御之事

附り左近将監由成之事

早稲田大學図書館
門 へ 13
3553
巻 27
早稲田大學図書館 昭和33.11.10 藏書

厭蝕太平楽記巻之廿七

住吉浩々社にて大騒動之事

并ニ安部貞任武蔵坊五兵衛之事

大月ちうら安貞村傳を聞今に猶絶し知れり

勇士八千余人ありて古来鹿蔵の一戦将足安貞が

武勇に任す其月一陣内の採揀に矢倉の武勇

数人の名を轟かす伺の軍勢も残らず書

付ちん絶し其根城の四ツ辺に人留めて其村に

出張来我人の兵を揃へて下さる百騎斗の遠近ハ

[illegible]

南条中務少輔百騎東南の角より谷をさくりて向ふ三百騎
二番目に控へて深田村をせめ次に峰を長尾が勢五百騎
若狭権守に力を合せ是に次て宿田丹波守が次
渋谷石見守備後守それ〳〵に小林島弾正
をはじめとして都合数千騎先陣に進み
かくて又我も〳〵と大将の陣営に押寄せ荒川
越前守を始め伊勢守を先として押寄せ
敵が待かけたる所へ近づき入替て入日
ふかく軍兵ともに続きける山路を越へ

小山修理亮これも備へを立て大将の勢を待
軍兵の大将越前少将殿一万余騎大将を下
相模守軍兵丹後守宿田河内守以下の軍勢
今日の陣所に下野守九千余騎河内国の山と合せ
しむ在所は遠江の路を過て進み寄る山の麓
大将へ下総守が勢二万余騎を率ひて上杉
民部大輔が手の者ども引続いて上総介
伊予守とも相模守ともに都合十万余騎
思ひ〳〵に百人組を旗本とし夜の明るを待けるは

老若男女今を限りと東西南北へ逃迷ひければ寄手は声
を発し勇気をまし大勢城中へ乱入り声を合せ
四方の大道にて一口も寄手を近寄らせず切立て防戦ふ
東部三十余町焼立て戦ひ大将の首を
ことごとく打取て討死する者数を知らず
城へ塙団右衛門入城して只一騎にて
せ来る寄手を十文字に突崩し
南大門に戦ひ寄手の大将
塙団右衛門を討んとせし

五郎の若武者が猛勢を問ひ
まし披露に及ぶ勇将として
敵を打ずして討取の関を
城中に籠る人々士卒に至るまで
その命を抛ちしとも
忠節を極め一戦の臣下を
しみじみ心す其気に及ぶ
ども流れは名にて一花の実を
元和元年五月八日落城

を取し後大将の寄手押寄鎌の旗をさしけ百
万の兵勢一男子取切とす城中兵も其節が
ひ亡ぼさんと大勢をまとひ数しらぬ兵を取囲み責戦
く何とも此はかなく数千の敵を手負し入道右
御心し我等くは命も今日を限り右府切腹せし
能く城内に方々の家にも乱なし不命に候れは
これまで城中の者共を捨る所なり主君の命を
けずして何とも城をも拙くして我らは天下に勢ある
敵もなし世に命を失はんと其由をなし申させども

夜の義経を追ひ行くことの上は漸く文字分なる段
能く城を攻むるといへども右(?)文太閤の忠宗にも夜討をし
是又孝道の為に先手の面々閣の前にて神妙にこれ
ある是非に候へば乙静に切腹の場所又下々を
うか承ると候へとも從臣にも何とも申す初めも
ト候する様に此が一命のるに我等大子なすけられ
その様に手からく市が切腹の陽とも拙者
並に其弟を是に此一身を天下に(?)さく
皆々是をもって流しまする摂津川健蔵

両雄右馬之助二人は忍びを随へ東馬に依て手に
國重るとの人々なと思ひあさる手に付手の中村や
秀頼公乃けなかりしが二代の浪人新御殿は酒井
大夫をはじめとしきつれ共ら其子蓋ぞ是迄也
以て秀頼ぎ一城をも護利て隠し莫義んと御い
義兵を揚げ先君太閤の恩を報ぜんと云ふ
有て世に捨られし人々此浪人を求め給ひ
なをまたみ浪人を召し先君の御恩を思ひ
来りて一揆をくはだてし此浪人の事

少し傳へし日本大坂又其節浪人の安けて心ある
儀付るに依てる出中の者とて下さりて太閤
大夫をはじめて浪人と云ふ事を下おて出人とか申しと
扨又さ世物諸する外に浪人を始め加藤大和の屋
むまれ振て人をば浪人の太閤様の御恩
ある世わたらひの者ども皆見て恩に感じ
右の外忠臣のあまた大中に入れ置くものをし
よし其外の浪人はかり手にも命をもしらぬ
後十文字鎗をけられ大将是の時また中に

あゝ此猪武者頼みの代りにお取なされなましかれ
とも外大将ひ七将之人徳川家へ内通と言ひ次へ出る者なく
一列る将を殺しめにおゐて正木大力は勿論切腹す
小野子夫々切腹し一旦乃えもんとして近江国へ落
ちもつたといふなる島台にて家老乃荒川
猪俣若しけれ共屋敷乃門口に家来一人もなく
此日の中山の前を通りけるに我ある事乱れ
迎ひる大夫も是に於いて是を留め彼是実々
大将くれ命とも申すけれ共鬼と人にて命を残ると思ひて

故実にて立退しさい井伊は大家なる者守文徳大夫我もと
乗込みけれは切腹小野乃次へ出て猪子に宛して大門前
三百姓達猶予を急ぎ追ひてるもと先に火移ると各々手当
の為ありし入縄の中方魂を失ひし中に若きも走る
隠する所はし出るもの者も通りても井伊
故実法師を静かに杖切腹場の火を消して火急に
みたすと知らずおゐて大内にては本多と合ての堺の
術と有れは織の家を走り上下けれは後を抜は有りし
又此ものやなりけんと悟りたる人もの如しと

勘蔵ハ力なく[illegible]言上す[illegible]君へ
[illegible]
[illegible]人の口より申付けければ扨又切腹[illegible]
の[illegible]を焼[illegible]勘蔵ハ力なく
[illegible]人へと[illegible]扨又[illegible]つ
[illegible]城内[illegible]と大に[illegible]
[illegible]
のよし城[illegible]
[illegible]本丸へ入[illegible]上段の間に太閤秀吉公

東帝より[illegible]
[illegible]
[illegible]上段の間に[illegible]
つかまつり今は太閤の前[illegible]今[illegible]ず
[illegible]
[illegible]大坂[illegible]
[illegible]大坂城[illegible]
又[illegible]落[illegible]今日[illegible]
[illegible]

衣食共が深く有り帯刀家代々の御家萬代の恩く
大久保が思ふ所ハとし仰ありけれバ大久保彦左衛門
方難儀を流しけるに拙者が思ふ所ハ只今御申する
上の取次の四しまして拙者ハ申すに於ハ右
太閤廿噂海にも安治上百にも蔵上御し御恩之
思ふも左は快じ我いまだ一ツもと深き御恩を深く
受しその儀にて拙者ハ御恩なり近来今の如し天下
とゆくいりつき人の世に候なりしも大事の如く御城
たのみけるそうじ也とも拙者ハ存申ししなハ跡有道

立所とし所ハ介けて思くども此けるん様子の
勇士の猛念悪み給ふ儀して御入の名を仕すること
と大坂堺く京迄に船をとさる太坂の島の方にて
召捕由して何事町人共をして新川の木をも上すと
ありて仮して大坂堺の町人ある衆を取堺の町人衆を取て
親いまだ何年比の浦にて雑ふ撚りて東に
化して也見いはらん今迄をもはや候まる生害
ものハ海なく也しものを交してけりするに死いは生存して上洛
方事る間さらずして御家に仕ふも内村の御事有ハ有るいならい道

きさめの日も夜ハ乱絶ず紀州の伊賀の隅にて哉
城ましいかにしわさと思ひ吉野に攻寄する所有時は城の
侍ら兎も角も出しも土文殊の勝を得ていつく
思ひすまんけ勝を越て其上も有ハ大小勢ふ摘ごく
大名は成とす有り覚ゆる宮方旗下ふ皆いる
是を云ふ事て宮に何とするなるを聞くは乞あらせる云
年まで勝を守りて気ん高くる城を成しいふとて
し乗りて進みて肥たくにて隠しも兵をひく路の
二百人は筆ふ年かる換ふに行軍大万の勢つく従ひ

湯佐ふかうし法師の伽藍の神宮を採り焼て
堺の国南の方も文殊の勝を去して大将かり
出まして探り出て向ひ採り立て移り勝る者
然るにひしも塩く逃向ひ得て信ありしに振見く楯
いく遁れ見て去るの人勝を見るとする者ハ悪逆
忍ぶ気色をえ心す流る道ハ汝さ谷へ逃越も
敵数とも過に参りて採り敵ゆる人の使者を集めて全く
社退く人も今も安信を守る者皆勤て一人も減ぜず
則ち行見て成を恐れておくにて居も散ハ

あくのめぐしと惣するなすくこれハ何事ぞと思ひし処へ
また方代が池へ投ぬ込し以てある投ね寄するハ浮上とし
てふるくしるの忠意すしえるよりそ自けれバ池の
しからし水底へ沈みしく入道バ沈底中より投ハ去ひ向が
すつぽんに成しと見えてはやせするとあやたいはいハ一つ
なりけりでもこそゆへし依し禍又を諸するかう何家を
長崎我郎ハ今の次第成ある八幡の辺よすなえよまる京
四方にあつし掛ゐたを大今まり御寄ねるまハもちなに上洛
すしによりの一日八番合戦しし記請の思ひおそ成と

先達て嫡子次郎三郎をしてなほ六波羅を
すゝめさせ都の内にもかけて悪口申成りな
そして世○わなかなか今は此所の地頭なくて
掛ける人々して是にて東てける最中にある掛ける投
国掛ゐいそんの京掛辺る掛ゐし治へしと申す
み依して天下安泰とて今年とろの叛すると国
掛君の代すに掛帝をさして京掛の辺る掛ゐる心を
えさく投ハこゐ此君の代に迷ひいふする果りすゝ
と人物集りて面して洛に発して何かく

しなれば我人〻の西の城の中へ来りしが見分
無事ならばなしとて内書を遣はし候と申て
御とて入道が父の桐の紋の御旗を揚ば大塔の宮の御父
にかはゆかるまへしとて入道為頼を討せよ
満ほんとてさやかに抜きたりとかしりたる陣をかまへるに入
少しもおせてたる女房より残を流していふて捨
下川へ出でしかば本陣もまた鬼せしかども
赤松の城代松平隠岐守が軍勢がれて近江北へ来る
さるにより京都へ遣登させる為の事なり

失ひけりかくして長田を誅せんと思ひ給ひける時城代
渡辺が手ひかりてもの援兵を出し合せ申み
城内の勢もてて用害をも重ねてよくもうる防戦をなし敵の
のりて乗り貌をさして死骸を京都へ上せ奉るは無念
なれば父の忠節を問覗きしたれども
るに勢ひ長子義政が敵に籠り居たるや
さて残る軍数を殺しく大塔とても所を攻め
の将の目覚ましき働きにて入道は手のほど
下を見廻り立ち退けば大に渡りに候の援

んとす安倍晴明不便に思ひて抱きとりて
かへりて養育しけるに生れつきのねぢけたる人
にて成人するに随ひて住所もさだめず所々の女を
そこなひ或は大坂の城内にて浪人に交りて世を
中にも〓〓〓〓の歌の〓〓〓〓〓此道の老人
に交りて今数国をへて〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
ることの時にも〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
〓〓〓〓〓〓〓〓〓の〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓川〓〓を

沈みしと〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
むかしの〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓の〓〓〓〓〓
〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
庵なりし〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
又川に〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓
〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓〓の士長る

掃部がにはあさ田氏がつとに子を持身なれば親
めでたき我子を思ひ煩ひともに今日迄もながらへらふ
あまり無念残念と思ひければこそ倍しくかなしくのぼりて
江戸へは女すがらしかたむ思ひの侭にあきらめて其のちに
の住居に蓄へし金は尽て宮仕ひ勤ぬと仮合で(?)
くらし候得共何とも叶ひ難く我身の為にと
又此度また御方にと源へよりて夫と妻と仕官
く倖の幸いわが身といへと何卒国にいかなる方の魔が
さして思ひ出来て殺さんとわざと様ぬめ女のいらぬを越る旅

御主君と其くれぐれにも申し候て其をよくいひけるは
のへは思ひのもすあさ田もくるまき定めし是
来らんとあひつげしら女がりとあつまり其身なれとりも
は御身と知りしく致すを様(?)し其中の作すれは色(?)殺
すれば宿の子孫つまりて又母(?)へ縦(?)れ尚又
又及くいつの日にかなし経利得をとげば何日も忠仕
来らしく御人にあるまはかしれぬ(?)も仇の道を
嘆くく体を彼をしたる只月見れど是しく一たる
とけしといふけれと掃部氏の告を申せば我(?)あ有

急ぎ返されし真下ほ方より河船已に分すのよ
と独り三人之叡文の殺ひをおそれく争合戦を
仕まじりけるとそ嫡子たる兵部大輔義教二男左兵衛督
將之并に百余人の若手をつれ作法と山治しよ東国
路の先へしへ二十騎よ遂要所あうへ叡ハ八幡
へし山落をねらひやうと云お旅治よ參せへへ
さ団倫の文百目の誠意ときへに出年物を激廣すもせ
今を掃疑用意してれ浮ぶとい分兵衛大輔義教らる
土州へ渡海して東寺にやれよ家來方并御

少人とも我にして文学を學をして大切の事を執
し土州へ渡りし方さして土州の薩州が我やしいと
去保に申にて夜にして乃命乞の兼而にとりて能當夫
鶏吏おいて土州とへ何かともに何に言て掃八曲
手無そ又之人に謀ハ衆頼みをる流くし嫡子
大助保茂文之助を始め外野士を捨てへ二百五十人
太前を之中一夜に是のう内いかにも安の薩州へ
前者いいと何けしてれ没し了軍をもらして
浮人の夫のなく伴とて大名もの事を下八右衛門事

三日よき合の時餘残わづかに七人也討死せしハ
何れも吉田九八兵衛が私めける宮士完山中ゆと
よれまし中根集人とも御しるべとらへとひらき
がみなりわしなる人ハ清長が代よ討死せし山口安之
其すの文ニ衛とも完山が比文本村長つき給ひし也
併岩城文本村助右ヱ門とも相文やまし主丁卯月
江のよ敵を赦しい桂源次郎野安まあり七人名ずて七右衛
其ニ清しつかよ前ニと世ありせし一篇しは切掛せし
もち山ハからに役太ありと邪まり文ご清時女比ハ國枝君と

母子ハえづまた新之丞の方から鐵右衛しとも連ゆとて
海気の文國枝君となし参せし従人の東梅ようらとせよとうこそ
長岡紋助と又男兵衛文部とらし今年亡父ありし安妻
のるのとて言古言九ハ親寧太夫様も次ニハ教文七郎左衛
多が首をこぶりて家中にハ其今ハいもハ吉田兵衛
の文を後あれとも九いまさにし言源七郎小討也
しく又强なるの海ぐ行なつそしはあさらあ邦とを人起ら
近ニ寿かいまか役也のは吉田兵右衛文とやしもの也
相文兵衛の偽ひかしとかしまり根岸甚八といえしか

誠ノ人ニ高日ホトリ真白ガ一跡ヲ尋ヌレドモ有ケル
ゆらふ乃秀摘ノ後代ニハ本村ニ生テ所ニ有ケル
顧モ人ニ伏シ合戦シテモ何ノ功ハ何ヲモ
付安ニ弟返テ其跡ノ如シ一ツ皆ニ當ヲ
人々アルヲ見テ果テ沈ンデ是ヲ波女ニモ
其身ヲ母ト思フハ乏カヘ指ニ安用切
余シテ其モ桜ハ遠有身シテ伴ニ指テ帝ル
長曽我部文子御ニ出
付ケ左馬之助石田蔵ニ

将軍ハ安居田ガ謀ニ会テ高ノヨシ引テ有ケ
ラル一宮摂津守河内守二十余騎中村ニ陣ヲ取
丹後摂津ノ石長宗我部ガ討レテ其外
其ヨリ河内ヘ入ル人ニ屍ヲ山ノ陰ヘ
目討ニ鷲尾山城守ノ人ハ寺多ク屍ヲ人ハ神
内ヘノ結ニ各ニ手付ヲ立テ打ス
両陣ニ近テ将軍国分城ヲ攻メ下
其々ニ討レテ残リ少ク成テ
入ニ大河ヲ下ル土ノ国ニ城ヲ立テ落テ

また山田に出張れば能流は大和路とかゝりて摂津国
丹波路よりは粟飯原が一族河内路をば汁村京都
の城代蒲生が一族布下勢を遣し江州の御番
遣人を出しもられ嵯峨山我が陣道より御道へ出てし
大津の浜辺浦に陣をかへし山城国玄賓寺にかゝる
御山かぎ兜にも今はまた二代の御一族は布下布の
下知ありて今は人の心もかはく五百人ばかり京都へ寄
乃旗本之衆は喜ばし我が手へ入し給ふ流ぬ
く脇より摂津の御道へ遣して右の撫斬にして人へ向く

世には自ら身が領田が御手を給はり奉せんとおもふは大雨
降り出し得たる橋も皆流れとて忽ち水嵩まさる
ことも八歳の花押有りて重ね是をもてく御ゆる
けれど今なほせ人へかゝる京都へ向ひ我を敵とせ
以下に尽き得ず手へかゝる私を勧め河内の手勢申の田へ
気の間をさせく主の旗押しも主人へ進み寄り人に向け
人々多く家来大いに討死するも今主の組の身に打
防ぎかねる家臣の衆も多く拵へ今は手に掛けてのける
口惜しくも追討へ攻め寄せ陣はれて差し上ぐ捨て右

与太郎ハ山路にて伊勢出向ひしが大勢にて又ある
ともえあしらひ坂尾山城守手下多く居けり
半円し押止めし鎧の嘉平次と郷士迄むかへ無念
も太兵衛しく討死なりければ佐々木捕られ寛も
今出太郎ハ村の者をすてゝ大坂へ出と云ふ
京極の年寄なる乙川と言ふ押捕る板ハ手取となると
おし持を捕り宛てに入東風のかたき戦て已に
雨らの其父のかたきを捕へんとす人々へ
近ハ荒次をも悲しみて敵に向かひ実朝し戦ハ

切腹し或ハ殺害せられし八幡太郎対面するの安否
ありて兵法指南人に打たれたる打敵の如く致シ置く
程なく戦ひて候ハ帰返して死してある先今
浅を極めて上様御手の方に拝大御帰城と人
願しける実否の事ハ七曽我兄を召捕て取
いかに父の子の仇を退治すべし大目付
二年にわたる此大将に対面仕ついで大坂一統
何の役仰付させ置き御前に出て
天の下をなやまし万民を苦しめ

に貴顕を深く施し一天下を治め仕りし基成
いはれ相模殿成りしと上杉も五郎すゝみ御
るゝ事あまりの臣何利勝手へ公家中の雷擾の訟
偽りし謀に京閲も内裏までも外しか
らせ玉ふのみ相模殿一族両家の豊臣の手にて
君にも矢すひとし思召すけらし先に傍中に忠あ
らね者入りて北条が棒に仰せ越し勅く中
なく代々の家御計略にも仕へ紀し其遠藤何
年何の心得もなく叛逆をなして我が

聞へし姫君を所望せしよりも南北の高橋をも体め
まする者東路へ流れともなし人を見
代将氷尾流様なる様有因が伊勢の方へ搦御前
君入は離別せらしと見えて我等とて人に
将に元就は纜截し頼ち島に来りて一番に連歌
て門入る清ひ文字ハ浮世下の一句を見つゝゆかしき
叛逆謀叛せ連之く事ハ此世と泥土の身の程を
ふまでも叛乱の徒らいはまゞ心なし世を
入りえざる曲有迄も身のとがを元就に見るてく

也より反逆をおこされ何事ぞ汝ハわが家臣なるに尾張の
らぬや我ハ古の関の跡を尋ね只一節合戦
をやんと欲すれ共忠義なれバ又汝が父ハ古関
勇士の冥理なるをとおもひ延々と古関の跡
其地を治して大軍をおこし古来は何程の事か汝
是非知らず汝捕へんとて矢をも放して汝が地を
人道なるべし我何汝が誘ふて以て我軍
父子の為に悪逆をも一定しく国中を攻め汝ハ
鹿の如くなる大なる三十日にて家を攻め罵る兵

後ぞきこえさせ給ひしかども汝が
わが身やの乱をおこし罪に伏すも構はぬ
もとを知らずやしきて亡き親を殺し
を伝へて上洛なと此事して入する人数一同
ことを流し其国に是をば我を援けさ
るしても我の名を汚し是を殺すハ鬼畜
ありとすべし人をして何よりすみ構ふる
汝が子のそとなして上を欺き捨てよりハ此なす
人数是をとせまして是ハ此の鎮し人の悪人

夜のかりおきなりければ切つけしたをみてもと怒りける
尊氏ハ足疾すばしこくてえ数を切くて又子
ハ人の首を撒つまうけよと仰けれバ又河田氏
ありつる者共ハ雑兵原ふられける収ハ悉く女房
まで人をえもなるがかね子佐兵衛沈思義殺一刀を
被りく女房を手殺しそれも目に血を
おしねぶりてはなるしありける者共息しきに津尤も分へ申付
役人ふれいしいで収ハ有るよ将のるめかりあへ
あまりぬきたる大海をとるは土別当事にゆうく

寝所に忍び寄る子の外へおちのびてはたと悟り
二人を警護して四方に附る何となく
警固の人を閉り合せる程なく山内方丸焼
かくて三郎を召捕て其身の上の
忠なるを以て
命じて其の下に
是れは無二の
しくしくまへなく
いかなる事ぞ

り合も世判なく先納涼るのをなさするに加所も
よく忠はからく一度は議を立て人と待てゐるに半
六月の頃幸に依りて不意に主人の邸へ
表ある大兵三郎小次と二人の若党の者を見えの
為に様の一鉢演しまね注かりけり為に文字
敵学もけるをと三郎が来て注すれば
けれ共お前しも添長方とすれに字時の見に
仕置もり文三郎も大阪遣し指人の亡
のちに国くれぬ九月の頃に文ら冷来

兵衛を待かねて進んで大音上げけれ共するに長曽我部
兵衛三郎を涙して出でまかする浄人へ向かふとも
まつべしといふ声をかけて聞も追手のかれぬれと
思ひ用意の太刀を抜かざしてあれ々と云ひと
切て出る受文字もち指人の右も一刀に突てく
おもて出てあるも是れ絵来る兵衛けられて三郎の
太刀を切合ひしたり已危き所を兵衛三郎兵衛を
切て飛しも島を取て打ち沼之て
兵衛と切て飛て見たえて三龍

実明ハ是を誅戮致しはしと今ハ上意つかんで
大勢の中へ切込人余てハ力なし観念なく
剰へ父子家子郎等一度に鑓先を揃へ実明
にて打ち取らんと今は大勢に取巻かれ
ける梅津修理は手を負ひ修理亮大井
三郎も同じく討死しけるが河原と伊勢の境にて
防ぎ忠臣なれば今川の家来に遂に討死
致しけるを見て五郎次郎は又人々と共に
土肥も是をすくひ太刀を振り廻しける中にも奮戦して

押寄せける三郎が御所の御兵を引きつれて修理
も又の軍にて討ち死して手を負ひ又子ども
追ひ返し給ひける仕合せにて大井三郎共を
従へて来りける処へ大勢の者ども切りかかれば
かく引き退きけるを見て手に取りて出る
人々みな三郎が勢に合せ戦ひ
ける父子共に討死してければ今は是迄なり
命惜しむべきにあらずと切腹せんと思ひけるが
来りし者共の中に女ども有りて口惜

是迄なりと今一働き皆くずれかゝる處へ押寄せ
山内と堀尾が城より打て入狼狽八段也に起返
こゝにしばらく邑のうちにと渡舞して打向ふ秋の
敵山者六十余人は前れたと走しかゝる後中
是なれば長々我が鉄砲山郷が一長文の信と受
て御国せし之人まゝ三成集年合戦をまぢわ
秋津の竹をあちら宿所中の方風を振まはす
なりと山内ら知と渡わりしく此に台家をおぼゆ
本まゝ文に台所が打画にして立の社を之刻と

七猿ゝ嫁かの村に信ものなりしと書して立寄なり
極八人事なりし山内は依年先を寺まゝ中六号方
二十歳と泳願すまゝ許し議しても申たびに
惜しむ知縁足くし攸なし無月事く前と添す
免しとしもし此電くしまゝ今の介鳥と今まて
押寄る此時受手赤手の少への長ある大浜山郷
まつ向ししも申しは先しまつ何徑く浮艘ある花
列く逃運しし四郎命し一尓子禽類く仕くしる
在直山郷先をすくし子とゝ人まゝまゝ文子支前れし

有家父の命をうけ既に来るものゝかゝる
乱に荒ぶる心を改めて運をまつて生捕な
むる事を末代の恥と思ひ安堵をも頼ミ奉り
出合とばし下知人の性命ハ龍虎の争ひ
討しは善を忘れず我死を思ひ定めて
敵の手にかゝらん迄と狼狽るも
打亡る迄して押寄る時の兵共陸と一同に
洪水を打越し其丸の先を討る瀬戸口
ハ静まり加へて鎌倉の鬼の大将を文学寺

少人をなし殿ハ不義ずと申て敵の
ら乞子も申て突て出る一二三の傷を被る事
小宮人の道に三刑の暴を道之く聞えん
遊ばす文字寺の一刀を打て突入の池を実
打ち追ひ力を尽し首を掻き落し打ち出る
大刑部今ハ是迄と言て討し人の鎧を取
文字寺子川辛人も右の子を誠に文を
の岸人も同じて石御人と切られ子川
其八郎討連ての所を切れるとは是で

芝え又宮の御行方を扱しもとめ給ふ抜首
志ありける足利殿にいひしく候ふそろくいかで世人を和
さを勇み謀叛して大塔の宮を亡ぼさんずるを打捕りて
今はけしと薬師寺之助山門を始め佐々木と訴にけるを
うけしに潤ひある時より文殿に忍びし受字赤字三人
大きなる者と同じく相違なく十余りにたりし参る大塔の宮
八数を追捕し味方をとらへて七条の入道の内受字
赤字三人をつけ今は是非と謀叛に事へ若狭
死しけるとき人しく切り少人を殺して計略の

文に追捕あるもの有し御所の居を隠しと命を
ら人大に敵をと申し人ぐしかりて是をとられ大
将打合せて首級取れ人とすまれこと全く安らず
死して起りて苦しき大将に思ひ是を大安く
あ堂にて御寺に逃げのかうかうして首をと渡し
さく之より取と其首の成して首をと
まとれ殺し首をと取し給ふ詞に何にしけり
城をはかり七月ならず人をと候ふ是と取さ中の
家をすられ足利殿に大鏡なりし殿を江戸の

らじ夜殺すゑし敵を伐すまふらバ助人とは
彼ア市也バ家中残らん殿の命まい出て首
をはら乃くをす改を止やむ也バ数ハ怨さそえ可る
けれは日本ら衣とを尤も也し訓衣す祭る
其の後に寺よし仮まる勢りしまんつく背を生と
神社よ寺く今の在ますまし太平天下の
社をし已ば万縁をふしぎの事どもなり

一席太平楽記前編巻之三尾